2000年1月1日（土）

新春ビッグ対談　これからの農

出席者

本田　信一さん
県農業法人協会会長
(農)南州農場代表理事
南州農場　資本金1124万円、売上高50億4000万円、従業員220人
肝属郡佐多町伊座敷

堀口　泰久さん
県農業経営者クラブ会長
鹿児島堀口製茶(有)代表取締役
鹿児島堀口製茶　資本金500万円、売上高13億円、従業員34人
曽於郡有明町蓬原

<司会>　安田　輝男
県農業会議事務局長

いよいよ二〇〇〇年。大きな時代の節目を迎え、それに呼応するように農業界にもここ数年、かつてない変革の波が押し寄せている。そこで今回は、これからの農業の展望を探るため、鹿児島県で地域農業をリードする本田信一さん(五七)と堀口泰久さん(五二)の対談を通じて、これからの農の姿を検証する。

□□　□□
これまでの農業は

安田　これまでの農業についての総括と申しますか、振り返るとどうお考えになりますか。

本田　従来の農業は、生産があくまでも主で、流通・販売はなかったわけですが、自分の経営をみても、いろいろな問題にぶちあたって多角化。必然的に流通・販売の方にいっちゃったんですね。ほかにも、観光農園、インターネット販売と、非常に変革してきたと感じます。

堀口　私も同感で、最初は生産だけからアンテナショップという形で販売に入ったんですが、やはり農産物であってもお客様の嗜(し)好をとらえての生産。そこが重要なことじゃないかと考えます。

安田　生産から販売、消費者ニーズをとらえた農業へシフトしてきたということですが、これからの農業はどう変わっていくか。また変えていかなければならないと思われますか。

堀口　生産する立場として環境保全。農業を永続的にするには、環境汚染の問題には真正面から取り組まないといけない。

それとやはり食料ということで安全性。人の健康に携わっているという視点が、今からさらに重要になってくる。

また、これからの農業ということでいきますと女性、農村女性の役割ですね。非常に大きなものがあると思います。

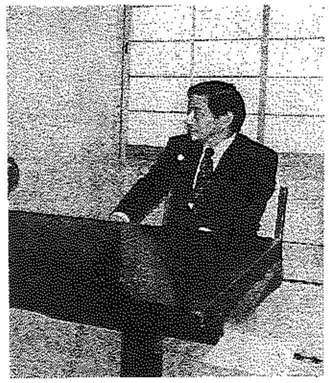
ゴミ問題への役割も　本田さん
環境や安全性を考慮　堀口さん

本田　私も堀口さんの意見に全く同感ですが、付け加えてゴミ問題。これに対して農業の役割、畜産用のエサになったり、耕種農業のたい肥になったり、相当なことができるのではないか。

それから、やはり農業ですから食料としての位置づけ。遺伝子組み替えの問題とかいろいろありますが、これからも堅持していかなければならないと思います。

□□　□□
経営をどう進める

安田　お二人の農業全般に対する所見をお聞かせいただいたわけですが、では、ご自身の経営の抱負としては、どのような構想をおもちですか。



本田　南州農場は豚から始まりまして、牛、食肉処理業、昨年から耕種農業の一環として大根、ニンジン、キャベツなども始めました。いま実験的に進めているのが都会から出る食物残渣(さ)。これを某量販店とタイアップして、豚のエサに利用するテストを始めています。

長いスパンで見ますと、登校拒否の児童を農業関係の学校で引き受ける。動物の飼養を通して、精神的に病んでいる子供たちを救いたい、と言ったら大げさですが、そういう取り組みの中で、違った姿が見えてくるのではないかと思っています。

堀口　私どもの会社だけでなく、近隣市町村でお茶を生産されている五十六人の方々と、高齢化する地域の農地を活用しながら地域農業の推進をしていきたいというのが一つ。また、有機農業への取り組みを進め、お茶のもつ健康促進への機能面を具体化しながら、生産を進めていきたい。

それから、農業後継者の育成。今までは、農業関係の学校を出て、すぐ家に帰るということだったんですが、これからの農業は規模的にも大きくなり、訓練の場の提供も必要かと。

あと、同じく場の提供としての高齢者雇用ですね。定年後の生きがいづくりなども含めて、高齢者への働く場の提供で、地域に根ざした生産に力を入れていきたい。

安田　お二人ともそれぞれ県農業法人協会、県農業経営者クラブの会長を務めていらっしゃいます。その組織としてのあるべき姿、またどういうふうに発展させていきたいですか。

堀口　経営者クラブには五百七十人ほどの会員がいらっしゃいますが、農業を全体的にとらえる視点を養い、自分の経営に新たな方向性を与えるため、部門を超えた交流をさらに進めていきたい。また、農業の法人化に向けての交流の場としても取り組んでいきたい。

あと、会員の中には後継者や新規就農者の受け入れをされている方が多くいらっしゃるわけですが、今後も率先して引き受けるような機能。ここも充実していきたいですね。

本田　私どもの法人協会は現在丸三年、六十法人の会員がいらっしゃいますが、会員個々をみますと、みな法人という社会の公器としての観点から意識の高いメンバーがそろっていると感じています。そういう中で、組織としてもやはり社会的使命を感じて活動しなきゃならんだろうと。ただ、数としては少ないわけで、県農業政策などに意見を反映させるためにも、もう少し会員を増やしたい。

また、農業法人が地域社会で、どのような経験を担っていけるか考えていきたい。

□□　□□
行政などへの提言

安田　行政・農業団体に対し「もっとこういう形で対応してくれるとよいのだが」という部分があると思いますが、いかがですか。

本田　ちょっと生意気な言い方になるかもしれませんが、従来は、行政から農業生産者に対して教え導くという考えが多かった。

昨今の、特にこれからの農業というのは自ら考え、自ら経営を行う、生産者ではなくて経営者という気構えが必要だと思います。市場原理、自由競争の農業ですね。そういう中で、行政も従来の指導の形を変えていく必要があろうかと。

鹿児島県の地域農業をリードする二人の熱のこもった対談

ただし、市場原理、自由競争ばかりじゃダメなんですね。冒頭に堀口さんがおっしゃった環境保全。この観点から見ますと、これは農業生産者の考えだけじゃ解決できないと思うんですね。これこそ、まさに行政の役割じゃないかと。今度、中山間地域への直接支払いがありますが、農業の多面的機能、水とか景観とか酸素の供給。これを勘案した施策、行政が必要ではないかと思います。

喜ばれ役立つ商品を　堀口さん
目標と理念を持って　本田さん

堀口　すべてに言えますが、農場とか現場にたった発想と言いますか、できるだけ農家に足を運んで、農家の実態を知ったうえで、施策などを行っていただきたいというのが一つ。

それと、農家と農家との潤滑油の役割。この役割を果たして、地域農業の活性化を図っていただきたい。

あと農家と行政がお互いに切磋琢磨(せっさたくま)し合って、農業施策を展開していけたらと思います。

安田　最後になりますけれども、自らも含めてこれからの農業経営者はいかにあるべきか、その提言といいますか、心構えのほどをお聞かせください。

堀口　農業生産が喜ばれ、役立つ商品づくり。そこを目標にしていかないといけない。ただ単に、値段が高かった安かったで一喜一憂する、それじゃいかんだろうと。安定的に商品を供給し、それを通じて社会へ貢献する。ここを目指すべきだと思います。

あとは、さっきも触れましたが、地域関係とか自然環境という枠組みの中での生産。これは外せない。

それと、法人化ですね。農業者一人では限界があり、規模拡大も容易でありませんから、法人にして人をどう生かしていくか、もっと言えば、どれだけ人を生かせるかによって、その経営が決まってくるんじゃなかろうかと思います。

本田　私の好きな言葉に〝闘う百姓〟〝考える百姓〟というのがあります。何に対して闘うかと言いますと、社会の不合理とかいろいろな問題があろうかと思うんですよ。そういうこと一つ一つに対して、きちんと自分の考えをもって解決する。

それから当然、自分の明確な目標なり理念をもってなければダメなわけで〝考える百姓〟ですね。〝哲学なき経営は滅ぶ〟と言いますから、自分なりに、かつ社会に容認される社会通念、常識ですね。これをもたなくちゃいけないだろうと。〝何のために、だれのために、なぜ〟というところでしょうかね。ややもすると、農業経営者に不足がちなことだと思っております。

安田　大変素晴らしいご提言で締めくくっていただきました。これからの農に向けた、政策提言や経営のヒントがお二人の話から数多く発信されたと感じます。どうもありがとうございました。